

1. 地域の概要

(1) 地理的位置

表 地理的位置

国名及び地域	アフリカ ケニア共和国 リフトバレー州 ケリチョ県
経緯度	南緯 0 度 20 分、東経 35 度 17 分

(2) 自然環境（地形、気候、植生及び土壌等）

- ・リフトバレー州は西部の大半を占めるケニア最大の州であり、その名前は州内を南北に縦貫するアフリカ大地溝帯に由来する。ケリチョ県は、アフリカ大地溝の中に位置する高原地帯である。
- ・本地域を含むケニア中央部のハイランド地区は、ケニアで最も雨が多く降る地域である。Aw（サバナ気候）に属するが、標高が高いため比較的冷涼な気候となっている。

(3) 社会的背景（人口、産業、歴史等）

- ・1999年の国勢調査によれば、リフトバレー州の人口は 6,987,036 人であり、主要な民族は北部のトゥルカナ族、サンプル族、中部のカレンジン族及び南部のマサイ族である。
- ・リフトバレー州は、ケニア国内で最も経済が活発な州の一つである。降雨に恵まれるため農業が盛んであり、州の経済基盤となっている。特に、中南部のケリチョ一帯の高原は、紅茶用の茶の栽培が盛んであり、また、園芸や牛の放牧も行われている。

2. 地域の自然資源の利用・管理の実態

(1) 自然資源の利用・管理の経緯と現状

- ・ケニアの紅茶栽培の歴史は、1903年に、ハイランド地域のケリチョ、ナンディーヒル、ソチック等において、イギリス企業がインドから取り寄せたアッサム種を導入したことに始まる。
- ・熱帯地域にもかかわらず降水量が多く冷涼なケニアのハイランド地域は、紅茶の原産地であるインド北部～中国南部にかけての地域と気候が似ていたため、順調に定着した。
- ・1963年にケニアがイギリスから独立した後に、政府が外貨獲得のために紅茶栽培を奨励したため、多国籍企業等による本格的な大規模農園開発が進められ、生産量が飛躍的に拡大した。

(2) 自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響

- ・ビクトリア湖へとつながる河川の集水域では、森林破壊と農業による土地の転用が問題となっている。

る。これはケリコの茶生産地域の微気候に影響を与え、少なくとも降雨量の減少と異常気象の原因となっている。

- ・また、森林破壊と過放牧は、川の流量変動の拡大、集水域保護機能の消失、土壌侵食や富栄養化を引き起こしている。
- ・さらに、土着的な森林被覆の減少と農業用地への転用が進むにつれ、植物の多様性とその動物相を支える能力が失われつつある。よって、水辺と農業用地における森林の残存は、環境保護だけでなく野生生物の保全にとっても重要となってきている。

(3) 上記問題点の解決に向けた地域計画等

- ・ケニア初の森林政策（特に集水域保護と木材生産）は 1957 年に打ち出され、「ケニアのための森林政策」の中で改定されている。1994 年には環境保全、持続的農業、貧困削減と農村開発の促進による持続的利益に焦点を当てた森林政策が採用された。
- ・1986 年の農業法によると水辺において最大で 30m の土壌や植生の破壊が行われた地域は耕さないこととなっている。河畔林を 50m に拡大することを提案した 2004 年の新しい法案は、翌年に改めて吟味されることとなった。この新しい法案は環境・自然資源管理におけるコミュニティ参画の必要性を明らかにした。
- ・ケニアの多くの政策、法律や生物多様性保全活動は官報告示されている森林や自然公園・保護区に焦点を当てている。官報告示されたものでも多くの小さい樹林帯は森林局が管轄する能力を保持していない。そのため、森林や木々は未だに薪、樹皮からの薬採集、農業の拡大などにより破壊され続けている。国内のたったの 17% しか森林に覆われていない状況である。
- ・しかし、2004 年のワンガリ・マタイ教授（環境・自然資源大臣補佐）の 100 万本以上の植林（ノーベル平和賞受賞）が例示しているように、ケニアにおける植林価値の評価が高まっている。

3. 取組事例の詳細

ユニリーバ・リプトングループの一員であり、ケニアで紅茶生産を行っているユニリーバ・ティー・ケニア（UTK）は、自社茶園であるケニアのケリチョ茶園において、環境保護と茶園で働く人々の生活・労働環境の向上に取り組んでいる。

(1) 取組事例の全体像

1) UTK 茶園の現状

- ・ケニアにある UTK の茶園は、リフトバレーの東（1,000 ha）と西（13,159 ha）に位置するリムルという場所にある。ケリチョ地区は樹林帯に近接している。この林冠が生い茂る樹林帯は生物多様性保全と鳥類の種が豊富な地域として国の指定を受けている。
- ・水辺の森林保全と UTK の土地の植林は、ビクトリア湖とナイル川につながる集水域保護において重要な役割を担っている。河畔林は Harvey Duiker や数種のサルの生存と渡り鳥の食糧確保の上で重要である。

- ・このような地域において、地域固有の種や絶滅危惧種の植林と、狩猟や企業活動による不適切な採取から守ることにより、生物多様性を確保することが可能である。
- ・UTK に賃貸された土地の 11%は、小川の周辺部を中心に森林で覆われている。ユニリーバの生態憲章と環境政策の下、UTK は茶・木材燃料の生産とその地域の保護を統合して行ってきた。
- ・この結果、ケニアの他の地域と比べるとユニリーバの茶園は森林保全が良好に行われている。会社が長い間維持管理してきた植物園に加えて、新しく三つの植物園（Chelimo, Cheymen and Theo Stanning garden）がこの 4 年で造成された。

2) UTK 茶園における重要な野生動植物の生息地

【河畔林】

- ・ケリコ周辺の茶の生産地はアフリカの低山帯に属している。Trees 2000 プログラムの一環として UTK が育成した河畔林は、野生生物の回廊と小保護区としての価値を持っている。
- ・一つの地区はサル保護区として指定されており、Colobus Monkeys と Guereza の個体群をサポートしている。
- ・二つの地区はレクリエーションの場所として提供されており、地域のレジャーや教育資源として森林が活用されている。

【断片的に残された森林】

- ・私有地には森林が断片的に残されており、原産の樹木や低木、ハーブが生育しており、鳥類等の動物が生息地となっている。特に渡り鳥にとっての止まり木や生息地としても活用されている。Trees 2000 はこのような地域をさらに増やし、新しく小さな森林パッチを景観内で創っている。

【植物園】

- ・4 つの植物園は環境保全と教育に利用されている。木々の樹名はキプシギス語とラテン語で表記されている。また、小植物園は会社員の家族や友人のために私有地や村の近くに造られている。

【湿地】

- ・小さな湿地帯は河川周辺の平たい場所や UTK の水力電力ダムの周りがある。よって、湿地の保全と改善が Trees 2000 チームの議題となっている。

【動物による利用】

- ・茶はモノカルチャーで栽培されている外来種であるが、地元の鳥類や動物には庇護地としてつかう種もいる。
- ・ユーカリノキやシノブノキなどの防風林が集まる地域は森林パッチと景観の回廊ネットワークをつなぐものとして多くの種に活用されている。

3) UTK の活動—Trees 2000 プログラム

【プログラムの内容】

- ・UTK は原産樹林の維持と植林を通じた環境保護と改善を目的として Trees 2000 プログラムを 2000 年 3 月に開始した。このプログラムは外来種の防除を行うことにより、河畔林の価値を高めることの重要性を認識している。しかし、その主な関心は植林をすることであり、その価値として以下の内容が挙げられる。

- ①景観の価値向上
 - ②原産樹木の絶滅危惧種の保全
 - ③あらゆる動物の生息地の保全と生物多様性の改善
 - ④環境保全・保護と残存森林やパッチの社会的価値の向上
 - ⑤持続的自然バランスの維持
- ・プログラムの目的は下記の通りである。
 - ①植物園の造成と維持
 - ②泉の蘇生と浸透率の向上による水量の増加
 - ③河畔林の剥脱改善
 - ④会社内外の環境意識と環境保全の促進
 - ・このプログラムの対象とする植物種の中には、樹皮の剥脱、薪の収集や伐採搬出業、木炭づくりなどによって危機に瀕している種も多い。

【プログラムの経緯と実績】

- ・プログラムの経緯は下表に示した通りである。これらの成果として、2005年までに、208,185本の木が植えられた。その後も、さらに会社の私有地の植林が進められている。
- ・これまでの活動の実績が認められ、2004年及び2005年に、Total Eco Challenge 金賞を受賞した。また、環境保全の顕著な貢献が認められ、2004年に東アフリカ Wildlife Society から表彰された。

表 プログラムの経緯

年	出来事
2000年	・苗木畑の開始と普及ガイドラインを発行した。
2003年	・ Chagaik 植物園が改装され、Chelimo 植物園が完成した。 ・ケリコ県におけるウフル庭園の再生と保護を含む、私有地外の植林プログラムが開始された。 ・5月に、教師に対するセミナーを目的とした教育プログラムが開始された。それ以来、多くの苗が地元の学校、研究所、コミュニティプロジェクト、エジャトン大学に寄贈されている。 ・UTK の農業マニュアルに原産樹木の管理と植林に関するガイドラインが導入された。これ以来、植林が私有地管理の重要な活動となり、毎年行われる会社の植林週間では、全職員が私有地に2本植林をしている。
2004年	・Mau Forest Pilot プロジェクトの植林活動のために世界自然保護基金（WWF）に5,000本の苗を寄贈した。 ・苗木の販売を始めた。これによって他の茶生産会社などの植林による利益を得ている。この取組により、自社茶園以外の樹木の生存率を上げると考えられる。

4) レインフォレスト・アライアンス認証の取得

- ・レインフォレスト・アライアンス（Rainforest Alliance、本部：ニューヨーク）は、今から約20年前に設立された、環境保護、農業従事者への公正な待遇、持続可能な農園管理などの基準を満たす農園に対して認証を与えている国際的な非営利環境保護団体である。
- ・ユニリーバ・リプトンは、レインフォレスト・アライアンスの持つ経験と、環境、社会、経済を総合的に捉えた認証プロセスの厳格な基準に着目し、持続可能な企業活動の評価を受けるためのパートナーとして選んだ。
- ・レインフォレスト・アライアンスの認証を得るためには、森林や生態系の保護から、土壌や水資源

の保全、労働環境の向上や地域コミュニティの形成等まで多岐に渡る厳しい基準をクリアする必要がある。

- ・ UTK のケリチョ茶園は、世界の紅茶園の中で最初にレインフォレスト・アライアンスの認証を取得した。ユニリーバ・リプトングループは、2015 年までに全ての紅茶園でレインフォレスト・アライアンスの認証を取得することを公約している。

(2) SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」から見た自然資源の利用・管理の詳細

本事例と5つの視点の主な関係は、下表に示すとおりである。

表 本事例と5つの視点の主な関係

5つの視点	本事例との関連
1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用	<ul style="list-style-type: none"> ・ UTK は、森林破壊や過剰耕作が、長期的に見ればケリコにおける紅茶生産に悪影響を与えることを理解しており、これに対応するために森林保全や植林を行っている。 ・ UTK は、地域の野生生物の多様性を語る上で、自社茶園内の森林が重要な存在であることを踏まえ、生物多様性保全の観点から質が高い自然環境の保全及び再生に努めている。 ・ 上記の観点は、レインフォレスト・アライアンス認証の基準として盛り込まれており、その履行が外部機関からも確認されている。
2) 自然資源の循環利用	(特記なし)
3) 地域の伝統・文化の評価	(特記なし)
4) 多様な主体の参加と協働	(特記なし)
5) 地域社会・経済への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・ UTK は、持続可能な自然資源の利用・管理においては、農業従事者への公正な待遇が重要であることを認識している。 ・ 上記の観点は、レインフォレスト・アライアンス認証の基準として盛り込まれており、その履行が外部機関からも確認されている。

以上

参考文献等

- ・ Unilever Tea Kenya, “Biodiversity Action Plan”, May 2005
- ・ Ecoagriculture Partners “Sustainable Tea Production in Kericho, Kenya”